

TERG

Discussion Paper No.477

第一次大戦以前のロンドン・バランスと
外国銀行コルレス預金：研究史の整理

菅原歩・古賀大介

2023年5月31日

TOHOKU ECONOMICS RESEARCH GROUP
Discussion Paper

GRADUATE SCHOOL OF ECONOMICS AND
MANAGEMENT TOHOKU UNIVERSITY
27-1 KAWAUCHI, AOBA-KU, SENDAI,
980-8576 JAPAN

1 はじめに

国際通貨史の研究において、ごく最近、古賀（2022）という研究成果が発表された。古賀（2022）の成果の内容をごく手短かに要約すると以下のようになる。

第一次大戦以前の外国銀行によるロンドンのクリアリングバンク（ロンドン手形交換所加盟銀行、以下、クリアリングバンクと示す）のコルレス預金（受入）額は、1913年にクリアリングバンク全体で約3000万から3600万ポンドと推定された。ここから、これは同年のクリアリングバンク16行の預金（受入）総額約7億4400万ポンドに対し、4.0%から4.8%であった¹。

本稿の目的は、上記の古賀（2022）の成果が、これまでの国際通貨史の研究の中でどのように位置づけられるかを検討することである。なお、古賀（2022）は、標題の「第一次大戦を契機とする大手ロンドン・クリアリングバンク「外国部」の変容」にある通り、第一次大戦以前に留まらず、第一次世界大戦期も対象とした研究である。本稿は、古賀（2022）のうち、第一次大戦以前を対象にした部分についての成果を検討の対象としている。

2 第一次大戦以前の国際金本位制とポンド体制

古賀（2022）の成果は、広くとれば、第一次大戦以前の国際通貨史の研究史の中に位置づけられると考えられる。そのため、まず、第一次大戦以前の国際通貨史に対する既存研究の成果を確認する必要がある。

第一次大戦以前の国際通貨制度は、伝統的に、「国際金本位制」の時代と認識されてきた²。第一次大戦以前の国際通貨制度を国際金本位制とみる見方は現在に至るまで維持されているといえるが、他方で国際金本位制の内実の研究が進むと、国際金本位制の機能の基盤を、この時代の世界経済の中心であったイギリスの金融制度と金融市

¹ 古賀（2022）。古賀（2022）では、ロイズ銀行ロンバード街支店の預金額とミッドランド銀行スレッドニードル街支店の預金額から、まずクリアリングバンク全体の外国顧客預金額を推定している。その結果は、5000万～6000万ポンドとなる。そこから、国内顧客による預金と、外国顧客の内の外国政府・企業による預金をそれぞれ差し引いた結果として、3000万～3600万ポンドという金額を推定している。

² 国際金本位制の始まりについては、確定的な説はないが、1871年のドイツの金本位制移行を重視する見解が多い。例えば、石見（1995）p.26、上川（2007）p.2。

場の機能に求める見方が有力となり、この見方も現在に至るまで支持されている。端的な表現の一例として下記の石見（1995）がある。

第1次大戦前の国際通貨システムは、古典的な金本位制というよりも、むしろイギリス中心のポンド体制と見なすのが実情に近いだろう。³

古典的な研究の一例としては、次のフォード（1960）がある。

1914年以前の金本位制は、ほとんど（largely）、ロンドンを軸（pivot）としたスターリング本位制とみなすことができるだろう⁴。

まとまった形で、「国際金本位制＝ポンド体制」という考え方を示しているのが、次のドラモンドの説明である。ドラモンドは、ポンド体制を、「スターリング本位制」という言葉で表している。本稿では、ポンド体制もスターリング本位制も同義として理解している。

多くの海外の銀行がロンドンに取引残高を保有し、必要なときにはロンドンで短期信用を手に入れることができ、また支払いの大部分はロンドンで決済されたのである。いくぶん狭い範囲においては、ロンドン市場からの民間信用は一時的な需要を満たすのを助けることができたので、ロンドン市場はある限られた程度において世界の貨幣システムへの最後の貸手として機能した。さらに、支払いの精算や多角的相殺は、もしそれがなかったなら為替相場や準備に圧力をかけたであろう2国間為替取引の必要性を低下させたにちがいない。1914年以前の金本位制は「事実上のスターリング本位制であった」というときに、ひとびとが心の中に描くのはこれらのことである⁵。

国際金本位制をポンド体制とみなす見方についてのより立ち入った説明は、下記の上川（2007）である。

19世紀の国際金本位制は、しばしば「ポンド体制」ないし「スターリング為替本位制」とも称される。その場合、国際資本移動に果たしたロンドン市場の役割、国際通貨ポンドの優位性、さらにはイングランド銀行の政策運営などが重視されている⁶。

³ 石見（1995）p.29。

⁴ Ford（1960）p.52。

⁵ ドラモンド（1989）pp.35-36。

⁶ 上川（2007）p.10。

上川（2007）は、上記の「ポンド体制」という見方の起源を、ケインズ（1977, 1913）と Smit (1934) に求めている。

国際金本位制の運営を、イギリスロンドンの特別の地位に結びつけて理解する考え方については、第一次大戦終了前に Keynes [1913 (1971)] があり、両大戦間期には Smit [1934]、Brown [1940]、さらに戦後は Williams [1968] など多い⁷。

スミット（Smit）との共同研究を受けて、「ポンド体制」としての国際金本位制という見方を早期に打ち出した Brown (1940) は以下のように述べている。

1914 年に本当に破壊されたのは、ロンドンに高度に集中されていた世界の信用システムであった。その信用システムは、イギリスの強力な国際的債権国としての地位と結び付いて、戦前（第一次大戦前：筆者）の金本位制を、本質的にスターリング為替本位制にしていた⁸。

「ポンド体制」としての国際金本位制という見方を Brown (1940) よりもさらに早期に打ち出した Smit (1934) は以下のように述べている。

歴史的な環境によって、ポンドは、イギリスとの商業取引と資本取引での債務を決済するために国際的に必要とされていたが、その世界的な需要の結果、あらゆる国の間での債務を決済するための慣習上の信用貨幣として、ますます利用されるようになった⁹。

この世界的な資金移動の機能によって、イギリスのポンドが国際金本位制期の基軸通貨となった。ここでは、基軸通貨は、「国際通貨の中でも中心的な通貨。国際決済が、ある特定の通貨でまた特定国の通貨決済システムを用いて決済されるとき、その通貨を基軸通貨、その国を基軸通貨国という。」（上川・藤田編（2012）p.418）という意味で用いている。上川・藤田編（2012）では、続いて、「国際金本位制ではポンドが、IMF 体制ではドルが基軸通貨として用いられた。変動相場制でもドルが基軸通貨であることに変わりはない・・・。」（p.418）とある。

⁷ 上川（2007）p.22。

⁸ Brown (1940) Vol.1, xiii.

⁹ Smit (1934) p.54.

3 ポンド体制の本質としてのロンドン・バランス

では、さらに立ち入って、「ポンド体制」の内実はどのようなものであったのかを考えていく。

戦前の世界では、世界の為替メカニズムの鍵は、海外の銀行がロンドンに置いてあるスターリング残高にあった¹⁰。

では、この「スターリング残高」とはどのようなものであったか。下記は、ブルームフィールド（1975、1959）による説明である。

疑いもなく、イギリスはその他の世界にたいし多額の短期債務をもっていた。それは主として外国のスターリング手形の保有、割引市場にたいする短期債権ならびにロンドン諸銀行への預金の形態をとっていた・・・¹¹。

このブルームフィールドの説明をまとめ直したものが、次の平岡（2016）である。

・・・イギリスの対外短期負債（債務）は、（1）外国人によるポンド建て手形の保有、（2）外国人によるロンドン割引市場に対する短期貸付、（3）外国人によるロンドン諸銀行への預金、という3つの形態をとっていた¹²。

ロンドンにおけるポンドの存在形態についても、上川（2007）に要領を得たまとめがある。

とりわけロンドンでは、各国の政府や中央銀行、民間銀行などが、ポンド建ての金融資産（預金、手形、貸付、大蔵省証券、国債など）を保有していたが、これらは「ポンド残高」（sterling balance）ないし「ロンドン残高」（London balance）と呼ばれる。狭義には、このうち、決済に使われるポンド建て当座預金を指している。まさにロンドン世界の多角的決済のセンターに位置していたのである¹³。

¹⁰ Brown (1940) xv.

¹¹ ブルームフィールド（1975）p.161。

¹² 平岡（2016）pp.19-20。

¹³ 上川（2007）p.10。

4 ロンドン・バランスの本質としてのコルレス預金

ロンドン・バランスは、前節でみたように、具体的には、（１）外国人によるポンド建て手形の保有、（２）外国人によるロンドン割引市場に対する短期貸付、（３）外国人によるロンドン諸銀行への預金、から成っていた¹⁴。

国際通貨制度史の中では、この３つの中で、（３）の外国人によるロンドン諸銀行への預金、すなわち「ロンドン・バランス（ロンドン残高）」が最重要視されている。その理由は、決済の機能の有無による。決済機能を持つ当座預金である「ロンドン・バランス」は、その金融上の機能によって、他の２つ（ポンド建て手形と、割引市場への貸付）とは異なる役割があるとみなされていた。この点について詳細に説明しているのは、次の増田（2012）である。

さらに、外国為替銀行は、通常、取引相手国の銀行との間で為替取引契約（コルレス契約）を結び、決済可能な当座預金形態の為替勘定を相手銀行内に開設する。そして、自国内で輸出業者から取立為替手形を買い取ったときには、コルレス銀行に手形を送付して取立を依頼し、手形代金を入金してもらう。輸入者に送金為替手形を振り出すときには、手形の名宛人であるコルレス銀行への支払いに、コルレス銀行内に保有する預金をあてる。つまり、外国為替銀行が介在する外国為替取引では、輸出入業者間の債権債務関係は外国為替手形の売買を通じて外国為替銀行間の債権債務関係に集中され、国際間の支払決済は外国為替銀行内の当座預金の資金移動によって行われる。ここでは、外国為替手形は預金の移転のための手段にすぎず、この制度にとって決済性を持つ預金こそが重要なものになる。そして、この制度的発展をもとに国際通貨が登場してくるのである¹⁵。

決済性の点から、外国銀行によるコルレス預金残高の本質的な重要性を端的に表現した文献は、下記のように多数ある。

・山本（1997）

国際通貨の具体的な存在形態は、中心国におかれた周辺国為替銀行の中心国通貨建て要求払い預金＝コルレス残高であり、かつてはポンド残高、今日ではドル残高と呼ばれる外国残高（foreign balances）である¹⁶。

¹⁴ 平岡（2016）pp.19-20。

¹⁵ 増田（2012）p.65。

¹⁶ 山本（1997）p.2。

・平 (1989)

ここまでくると、国際通貨の実体は今や明らかである。それは、広く世界貨幣に代わって国際決済の手段として機能するにいたった特定国通貨建流動債権あるいは特定国の銀行に対する当座預金債権であるということが出来る¹⁷。

・深町 (1989)

ところで上述のポンド建当座預金が国際通貨（取引通貨）として機能するというのは、・・・いっさいの為替取引による国際的債権債務が、ロンドンの銀行におかれたポンド建当座預金からの引落とし（借記）、入金（貸記）によって相殺・決済されることである¹⁸。

これらより、第2節で引用した Smit の古典的研究（1934）も、コルレス預金や当座預金という言葉を使ってはいないが、「決済」という点を強調していたことを再度指摘しておく必要があるだろう。

歴史的な環境によって、ポンドは、イギリスとの商業取引と資本取引での債務を決済するために国際的に必要とされていたが、その世界的な需要の結果、あらゆる国の間での債務を決済するための慣習上の信用貨幣として、ますます利用されるようになった¹⁹。

そのために上川（2007）は次のように書かれていたわけである。

（ロンドン残高は：筆者）狭義には、このうち、決済に使われるポンド建て当座預金を指している。まさにロンドン世界の多角的決済のセンターに位置していたのである²⁰。

5 第一次大戦以前のコルレス預金の規模にかんする先行研究

ここまでで示してきたように、「第一次大戦以前の国際通貨体制→国際金本位制→ポンド本位制→ロンドン・バランス（広義）→コルレス預金（＝狭義のロンドン・バランス）」として、第一次大戦以前の国際通貨体制の中核部分を取り出すための分析が進んできた。次に、このロンドンのコルレス預金の規模について考えていく。

¹⁷ 平 (1989) p.106。

¹⁸ 深町 (1989) p.92。

¹⁹ Smit (1934) p.54.

²⁰ 上川 (2007) p.10。

しかし、実は、第一次大戦以前のコールレス預金の具体的な金額に言及した研究は存在しない。第一次大戦以前のコールレス預金の「規模感」について言及している研究でさえ、次にあげるバジヨット（2011, 1873）以外には存在しない。コールレス預金の「規模感」について、バジヨット（2011, 1873）は次のように述べている。

いまや諸外国にとっての手形交換所であるロンドンは、諸外国に対して新たな責任を負っている。多くの人々が支払いをする所には、それがどこであれ、これらの人々の資金が必ず保管されていなければならない。ロンドンにある外国の多額の預金は、いまや世界の商業にとって不可欠になっている²¹。

ロンバード街にある外国政府の資金は、まもなく大幅に減少するとみられるが、個人の資金はますます多くなるだろう。商取引の差額決済に必要な、手形交換所における預金は、商取引自体が増えるにつれて必ず増大することになるからだ²²。

第一次大戦以前のロンドンのコールレス預金の「規模感」については、このバジヨット（2011, 1873）の「多額」、「ますます多くなる」、「増大」という言及しかない。そのため、深町（1989）や山本（1997）が、決済性預金としての狭義のロンドン・バランスの重要性を強調している際も、その金額については、「規模感」に関して、このバジヨット（2011, 1873）を直接引用している。

このような研究状況から、古賀（2022）は、第一次大戦以前のロンドンのコールレス預金（＝狭義のロンドン・バランス）の具体的な金額について、研究史上初めての測定であるという点で、きわめて大きな意義をもっているものと思われる。

6 第一次大戦前のコールレス預金額への間接的接近（1）：戦間期のデータ

5節で示したように、ロンドンにおけるコールレス預金の具体的な金額について、先行研究は何も述べてはいない。しかし、戦間期については、「マクミラン委員会」による調査（『マクミラン委員会報告書』（1931））があり、私たちはロンドンにおけるコールレス預金の金額について具体的に知ることができる。

マクミラン委員会の調査によって明らかにされた外国銀行によるクリアリングバンクへの預金額は、表1および図1に示している。表1は、外国銀行による預金に加えて、外国政府とその他外国顧客による預金も示している。表1から外国銀行による預金のみを取り出したものが図1である。

²¹ バジヨット（2011）p.45。

²² バジヨット（2011）p.45。

古賀（2022）の推計による、1913年の外国銀行のコルレス預金額3000万～3600万ポンドと比較するために、各年の預金額をここに示すと、1927年8062.4万ポンド、1928年8350.4万ポンド、1929年6933.5万ポンド、1930年1億3220万ポンド、1931年1億580.4万ポンドである。しかし、1927-1931年のコルレス預金額と比べて、1913年のコルレス預金額が大きかったのかどうか、という点は、物価の変化やイギリス経済の規模の変化なども考慮に入れる必要があり、何らかの基準の統一が必要になるだろう。特に、1913年と1927-1931年は間で第一次世界大戦が生じているため、物価などの変化がかなり大きかったと考えられる。何らかの基準化を行った上での比較は第8節で行う。

7 第一次大戦前のコルレス預金額への間接的接近（2）：第一次大戦前イギリスの対外短期債務

第5節で既述のように、第一次大戦以前のコルレス預金の具体的な金額に言及した研究は存在しない。しかし、事実上、第3節で述べた「ロンドン・バランス」の規模に関して、同時代のものを中心に断片的な言及がいくつかみられる。それらの言及は、イギリスの対外短期債務の規模の把握という意識でなされているものもある²³。

第一に、ロバート・ギッフェンが、1901年には、即座に請求される可能性のある約5000万ポンドが、外国の銀行や商人たちによってロンドンに保有されている、と述べている²⁴。

第二に、ステイティスト誌が、1902年には、大陸ヨーロッパからだけで6000万ポンドの資金がロンドンの短期金融市場において運用されていた、と述べている²⁵。ステイティスト誌が、ここで短期資金に含めていたのは、大蔵省証券（Treasury bills）と国庫債券（Exchequer bills）への投資、手形市場への投資、証券取引所取引への貸付であった²⁶。コンソル債への投資と戦時国債への投資は含まれていなかった。

第三に、フェリックス・シャスターは、1904年には、外国人が、5000万から1億ポンドのポンド建て手形を保有していると述べている²⁷。シャスターはまた、このポンド建て手形の保有とは別にも、外国人が保有する資金があったと示唆している。

²³ 以下の第一から第四の各推定のまとめの初出は、侘美（1976）pp.67-68 であると考えられる。侘美（1976）pp.67-68 は、対外短期債務だけではなく、対外短期債権の各推定も取り上げている。

²⁴ Giffen (1901) p.258.

²⁵ The Statist (1902) p.407.

²⁶ 大蔵省理財局（1926）p.129.

²⁷ Schuster (1904) p.61.

第四に、デイビッド・ウィリアムズの言及がある。ウィリアムズの言及はいささか複雑である。ウィリアムズは、1914年には、ロンドンあて（したがってポンド建て）の外国手形の発行額は3億4000万ポンドであったと述べている²⁸。これにすぐ続けて、ウィリアムズは、1914年に、ロンドンは、1億3000万ポンドの対外短期債権を保有したと述べている²⁹。

この第四のウィリアムズの言及の後半部分については、侘美（1976）と平岡（2016）は、「純債権」と判断している。本稿も、これらの見解に同意したい。さて、このウィリアムズの言及の後半を、「1億3000万ポンドの純債権」と理解すると、次は、この純債権と、ウィリアムズの言及の前半の手形振出しに対する3億4000万ポンドの債権との関係が問題になる。ここから、差し引きによって、イギリスの短期対外債務が推測できる可能性があるためである。しかし、この関係性については、ウィリアムズは何も述べてはいない。

ここで、仮に、イギリスの対外短期債権が手形の3億4000万ポンドだけだったとすると、「対外短期債権3億4000万ポンド－対外短期債務＝純対外短期債権1億3000万ポンド」となるので、対外短期債務は、2億1000万ポンドとなる。

現実的には、手形だけが対外短期債権であったとは考えにくいので、実際には、手形とは別の対外短期債権がプラスアルファとなる。そうすると、上式より、対外短期債務も同額のアルファだけ大きくなる。したがって、2億1000万ポンドは、1913年のイギリスの対外短期債務の最低限ということになる。

ここで、上記のギッフェン、ステイティスト、シャスター、ウィリアムズの言及をまとめたものが表2である。この4つの言及で示された資産の形態を、ブルームフィールド＝平岡が示したロンドン・バランスの3つの形態と対照してみる。ブルームフィールド＝平岡の3つの形態は、（1）ポンド建て手形、（2）ロンドン割引市場への貸付、（3）ロンドン諸銀行への預金、であった。

ギッフェンが示した「短期通知資産」は、ブルームフィールド＝平岡の3つの形態の（1）（2）（3）すべてを含んでいる可能性もあり、（1）（2）（3）のいずれかのみ可能性もあり、（1）（2）（3）のうちいずれか2つを組み合わせたものの可能性もある。次に、ステイティストの示した「短期資金」も、ギッフェンの場合と同様の可能性をもっている。シャスターの言及は、明瞭に、（1）のみを指している。ウィリアムズについては、あいまいな点もかなり残るが、取り上げている金額は基本的に手形の債権債務と考えると、やはり（1）のみとなる。

²⁸ Ferguson (1999) p.433 には「大陸欧州の手形引受業務を多く行っていたクラインウォートやシュローダーのような商会は、3億5000万ポンドの債権を持っており」という記載がある。

²⁹ Williams (1963) p.515.

8 古賀（2022）のコレス預金額をどう解釈するか

古賀（2022）は、1913年の外国銀行のコレス預金額を、3000万ポンド～3600万ポンドと具体的に明らかにした。この古賀（2022）の成果と『マクミラン委員会報告書』（1931）を比較することで、私たちは、第一次大戦以前のロンドンにおける外国銀行のコレス預金が、バジヨット（2011, 1873）のいうように「巨額」であったかどうかということを検証することができるようになった。

1913年および1927年から1931年の外国銀行コレス預金額は、表3の左側に示した。しかし、各年のコレス預金額の大きい・小さいを評価するには、何らかの基準化が必要になる。基準化の際の「基準」はさまざまなものが考えられる。本稿では、クリアリングバンクの総預金、国民所得、物価、経常収支、ロンドンの手形交換所取引額を基準として使用した。表3の右側の1913年の総預金額の詳細は表4に、1927-1931年の預金総額の詳細は表5に、それぞれ示している。経常収支は、経常受取と経常支払いに分けた。それらの基準化の結果をまとめて示したものが表6および図2である。

表6および図2から分かったことは、第1に、1913年から1929年でみると、いずれの指標でも外国銀行コレス預金の比率が、大きくは異ならないということである。特に、先行研究で強調された、決済性預金としての外国銀行コレス預金の重要性から考えると、手形交換総額に対する比率が安定してしている点が注目される。第2に分かることは、1930年・1931年になると、外国銀行コレス預金の比率が1913-1929年の時期と比べて大きく増加していることである。

これらの点をさらに立ち入って評価するためには、『マクミラン委員会報告書』によって比較的詳細なデータが明らかになっている戦間期の状況についての検討が必要になるだろう。また、古賀（2022）で明らかにされている第一次大戦期の外国銀行コレス預金の推定額の基準化に加えることも必要となる。しかし、これらは本稿の範囲を超えているので、今後の課題としたい。

9 今後の研究課題

今後の課題としては、第一に、上述のように、古賀（2022）で明らかにされているものの今回取り上げるのでできなかった第一次大戦期の外国銀行コレス預金と、『マクミラン委員会報告書』で明らかにされている外国銀行コレス預金の変動要因の検討がある。これらを行うことによって、1913年の外国銀行コレス預金の具体的な規模と、1870年ごろのバジヨットによる「多額」という評価の比較をさらに進めることができる。第二の課題としては、第7節で取り上げたイギリスの対外短期債務全体の金額や金融資産の形態をさらに調査することである。第三には、上記第二の課題

の探求の結果と古賀（2022）で明らかになった外国銀行コルレス預金との関係性を明らかにすることである。

参考文献

- 石見徹（1995）『国際通貨・金融システムの歴史：1870-1990』有斐閣
- 大蔵省理財局編（1926）『英國の國債に関する調査』大蔵省理財局
- 小野朝男・西村閑也編（1989）『国際金融論入門 [第3版]』有斐閣
- 上川孝夫（2007）「国際金本位制」上川孝夫・矢後和彦編『国際金融史』有斐閣
- 上川孝夫・矢後和彦編（2007）『国際金融史』有斐閣
- 上川孝夫・藤田誠一編（2012）『現代国際金融論 [第4版]』有斐閣
- ケインズ、J・M（1977）（則武保夫・片山貞雄訳）『インドの通貨と金融』（ケインズ全集第1巻）東洋経済新報社。（John Maynard Keynes (1913) *Indian Currency and Finance*, Macmillan and Co., Limited）
- 古賀大介（2015）「20世紀初頭の主要ロンドン・クリアリングバンクにおける「外国部」の活動と収益」『山口経済学雑誌』第64巻、第3・4号
- 古賀大介（2022）「第一次大戦を契機とする大手ロンドン・クリアリングバンク「外国部」の変容」、日本金融学会歴史部会報告資料、2022年4月9日
- 平勝廣（1989）「国際通貨」小野朝男・西村閑也編『国際金融論入門 [第3版]』有斐閣
- 侘美光彦（1976）『国際通貨体制ーポンド体制の展開と崩壊』東京大学出版会
- ドラモンド、I・M・（田中生夫・山本栄治訳）（1989）『金本位制と国際通貨システム 1900-1939』日本経済評論社
- バジヨット、ウォルター（久保恵美子訳）（2011）『ロンバード街：金融市場の解説』日経BP社（Walter Bagehot (1873) *Lombard Street: A Description of the Money Market*, Henry S. King）
- バロー、E（西村閑也・藤沢正也訳）（1964）『英国の金融機構』法政大学出版局
- 平岡賢司（2016）『再建金本位制と国際金融体制』日本経済評論社
- 深町郁也（1989）「国際金融市場」小野朝男・西村閑也編『国際金融論入門 [第3版]』有斐閣
- ブルームフィールド、A・I（小野一一郎・小林龍馬訳）（1975）『金本位制と国際金融ー1880-1914年』日本評論社
- （加藤三郎・西村閑也訳）（1985）『マクミラン委員会報告書』日本経済評論社

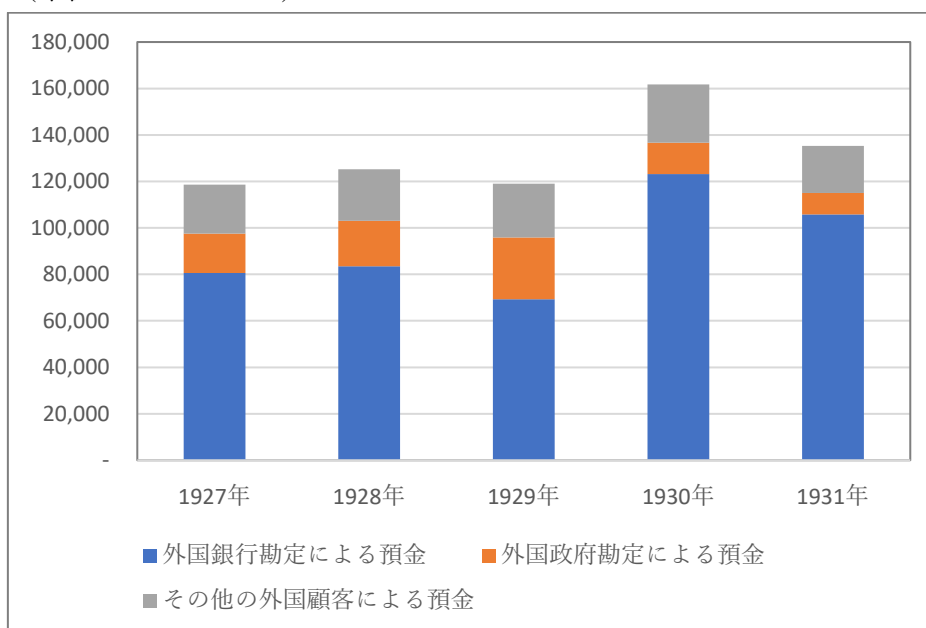
- 増田正人 (2012) 「国際通貨」上川孝夫・藤田誠一編『現代国際金融論 [第4版]』
有斐閣
- ヤッフエ、E (三輪悌三訳) (1965) 『イギリスの銀行制度』日本評論社
- 山本栄治 (1997) 『国際通貨システム』岩波書店
- Brown, Jr., William Adams, (1940) *The International Gold Standard Reinterpreted 1914-1934*,
Volume I, National Bureau of Economic Research
- Ferguson, Niall (1999) *The House of Rothschild: The World's Banker 1849-1999*, Penguin Books
- Ford, A.G. (1960), Notes on the Working of the Gold Standard before 1914, *Oxford Economic
Papers*, Volume 12, Issue 1
- Giffen, R. (1901) The Expenditure of National Capital, *Journal of Institute of Bankers*, Vol. XXII
- Mitchell, B.R. (1988) *British Historical Statistics*, Cambridge University Press
- Shuster, F. (1904) Foreign Trade and the Money Market, *Journal of Institute of Bankers*,
Journal of Institute of Bankers, Vol. XXV
- Smit, Carel Jan (1934) The Pre-War Gold Standard, *Proceedings of the Academy of Political
Science*, Vol.16, No.1.
- Statist, The (1902) Foreign Capital in the London Short-Loan Market, February 22
- Williams, David (1963) London and the 1931 Financial Crisis, *Economic History Review*, Vol.15,
No.3
- Williams, David (1968) The Evolution of Sterling System, C.R. Whittlesey and J.S.G. Wilson,
eds., *Essays in Money and Banking: In Honour of R.R. Sayers*, Clarendon Press

表1 ロンドン手形交換所加盟銀行とイングランド銀行の外国顧客預金
(単位：1000 ポンド)

	1927年	1928年	1929年	1930年	1931年
外国銀行勘定による預金	80,624	83,504	69,335	123,220	105,804
外国政府勘定による預金	16,983	19,531	26,493	13,500	9,174
その他の外国顧客による預金	20,998	22,149	23,274	25,000	20,335
合計	118,605	125,184	119,102	161,720	135,311

出所：『マクミラン委員会報告書』p.251、第9表のデータより作成。1927-1930年は6月末、1931年は3月末の数字。

図1 ロンドン手形交換所加盟銀行とイングランド銀行の外国顧客預金
(単位：1000 ポンド)



出所：表1より作成。

表2 イギリスの対外短期債務に関する推定

	対象年	金額	所有者	資産の形態
ギッフェン	1901年	5000万ポンド	外国の銀行と商人	短期通知資産
ステイティスト	1902年	6000万ポンド	大陸ヨーロッパ	短期資金
シャスター	1904年	5000万～1億ポンド	外国人	ポンド建て手形
ウィリアムズ	1913年	2億1000万ポンド	外国人	ポンド建て手形

出所：Giffen (1901) p.258, The Statist (1902) p.407, Schuster (1904) p.61, Williams (1963) p.515, より作成。

表3 クリアリングバンクの外国銀行預金額と総預金額
(単位：1,000ポンド)

	コルレス預金額	総預金額	比率
1913年	36,000	744,660	4.8%
1927年	80,624	1,788,150	4.5%
1928年	83,504	1,872,505	4.5%
1929年	69,335	1,836,651	3.8%
1930年	123,220	1,904,372	6.5%
1931年	105,804	1,754,968	6.0%

注：「コルレス預金額」は、外国銀行によるコルレス預金額。

出所：コルレス預金額は、1913年は古賀（2022）、1927-1931年は、『マクミラン委員会報告書』（1931）p.251のデータより作成。総預金額は、1913年は表4のデータより、1927-1931年は表5のデータより作成。

表4 クリアリングバンクの預金総額（1913年）

（単位：1000ポンド）

	預金額
London City and Midland Bank, Ltd.	108,584
Lloyds Bank, Ltd.	106,619
London County and Westminster Bank, Ltd.	104,248
National Provincial Bank of England, Ltd.	73,799
Barclay and Co., Ltd.	66,442
Parr's Bank, Ltd.	53,842
Union of London and Smiths Bank, Ltd.	52,185
London Joint Stock Bank, Ltd.	45,111
Capital and Counties Bank, Ltd.	44,119
London and Southwestern Bank, Ltd.	25,451
William Deacon's Bank, Ltd.	19,800
Glyn, Mills, Currie, and Co.	18,799
Metropolitan Bank of England and Wales	11,175
National Bank	6,238
Robert, Lubbock and Co.	4,318
Martins Bank Ltd.	3,930
合計	744,660

出所：古賀（2015）、*The Economist*, Banking Supplement, 1914, *Bankers' Almanac*, 1914より作成。古賀（2015）については一部修正した。

表5 クリアリングバンクの預金総額（1927-1931年）

（単位：1000ポンド）

	1927年	1928年	1929年	1930年	1931年
Midland Bank Limited	374,375	394,591	379,623	399,606	360,247
Lloyds Bank Limited	357,190	352,162	351,651	364,655	333,741
Barclays Bank Limited	318,373	335,081	337,439	349,273	335,565
Westminster Bank Limited	280,612	294,087	285,160	291,580	272,406
National Provincial Bank Limited	273,597	290,310	271,712	293,380	261,926
Martins' Bank Limited	62,891	82,933	82,620	78,563	75,927
National Bank Limited	36,578	37,476	37,393	36,284	36,978
Glyn, Millis and Co.	34,875	35,928	34,459	39,536	32,104
William Deacon's Bank Limited	32,663	32,221	31,793	32,009	29,044
Coutts and Co.	16,996	17,716	19,801	19,487	17,030
合計	1,788,151	1,872,506	1,836,651	1,904,372	1,754,969

出所：*The Economist*, Banking Supplement, 各年より作成。

表6 外国銀行コルレス預金額の各種指標に対する比率

(単位：%)

	総預金	名目 GDP	経常受取	経常支払	手形交換
1913年	4.8	1.7	3.5	4.5	0.2
1927年	4.5	2.0	5.8	6.1	0.2
1928年	4.5	2.1	6.0	6.4	0.2
1929年	3.8	1.7	4.9	5.2	0.2
1930年	6.5	3.0	10.6	10.6	0.3
1931年	6.0	2.8	12.6	10.9	0.3

注：「総預金」は、クリアリングバンクの外国銀行コルレス預金額÷同じく総預金額。

「名目 GDP」は、同じく外国銀行コルレス預金額÷イギリスの名目 GDP。

「経常受取」は、同じく外国銀行コルレス預金額÷イギリスの国際収支における経常受取。

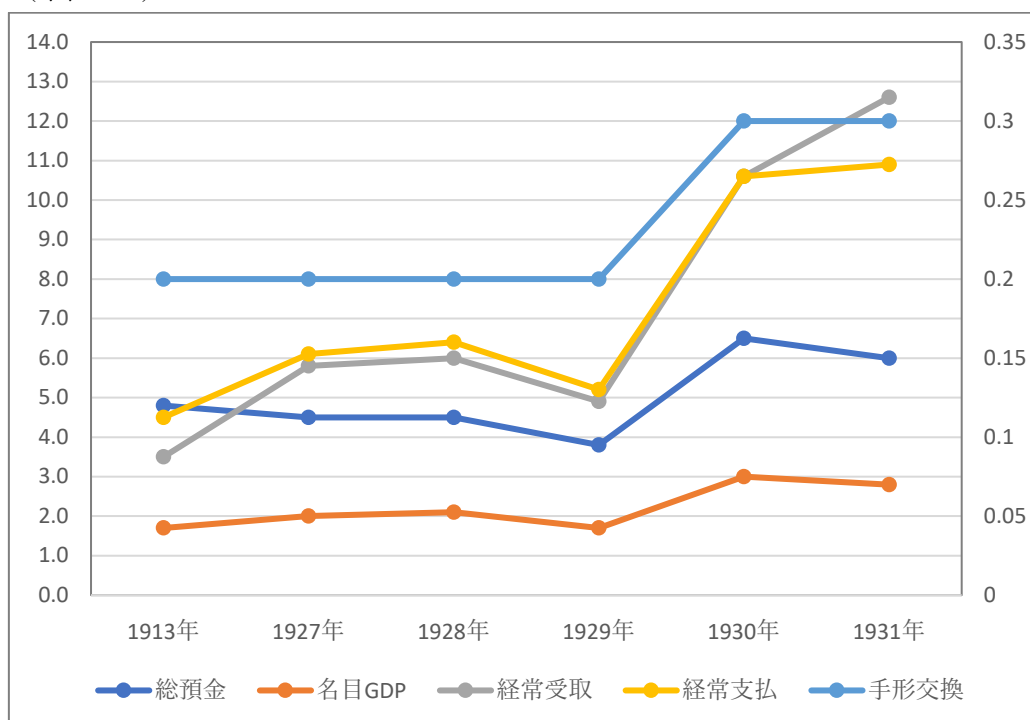
「経常支払」は、同じく外国銀行コルレス預金額÷イギリスの国際収支における経常受取。

「手形交換」は、同じく外国銀行コルレス預金額÷ロンドン手形交換所総交換額。

出所：以下のデータより作成。コルレス預金額は表3のデータ。名目 GDP、経常受取、経常支払は、Mitchell (1988) pp.828-829, pp.871-872 のデータ。手形交換は、*Bankers' Magazine* 各号のデータ。

図2 外国銀行コルレス預金額の各種指標に対する比率

(単位：%)



注：左軸は、総預金、名目 GDP、経常受取、経常支払。右軸は、手形交換。

出所：表6のデータより作成。